

Title	十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(一) : 一八四八年以前のチャーティスト運動とマルクスおよびエンゲルス
Sub Title	British labour movement and Marxism in the Nineteenth century : K. Marx and F. Engels and the Chartists before the revolution of 1848
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.12 (1960. 12) ,p.1029(9)- 1042(22)
JaLC DOI	10.14991/001.19601201-0009
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601201-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

域的経済統合を具体化するために望ましいと思われる方向が、ある程度まで解明されたと考へる。しかしながら、現実の問題として、これら諸国が前掲の四つの要件を充たして、これを実現しようとする日は、遺憾ながら、そう近いとはいきれない。長い歴史的経過の間に、西方諸国との深い結合関係を維持し、独立後はむしろ独自の存在を強調しがちであったこれらの国々が、短期間の間に、相互間の協力体制を強化することは困難であろう。まして現段階のアジアは、地理的にも、政治的・経済的にも一つではないのである。

したがって今後アジアにおける経済統合の促進を図るためには、何よりも先ず相互間の話し合いの場を増加し、これを組織化してゆくことが肝要である。この関連からいえば、エカフェはその斡旋機関として最適のものであり、その活動の強化に期待が寄せられる。実際問題として、種々の批判を浴びながらも、昨年と本年ですでに二回に亘って開かれた域内貿易促進会談は、この問題についての相互間の理解を深めるうえに、相当の成果を挙げていると評価できる。この種の会合は、今後もなるべく数多く持たれることが望ましいし、さらに種々な意味での人的交流の増大が必要と見られる。こうした交渉や接触を通じての相互間の連帯感と信頼感を育成しなければ、協力体制の樹立は難しいと見られるからである。

終りに、日本もまたアジアの一国としての立場を保つ限り、東南アジア諸国の前記四要件の充足を援護することを忘れてはならない。(一)の政治的統合の方向に関しては、東南アジア各国の政治的な

立場に基づく、自主的な選択に任せるとして、(二)と(三)については、アジアにおけるいわば近代化の経験者として、大いに智慧を貸すことができる筈である。つまり日本自身が、ある地域のグループ内の一員として参画するというよりも、智識(技術を含めて)の輸出を図ることが賢明であろう。すなわち各般の意味におけるアドヴァイザリーないしはコンサルタントとしての役割を担当することである。

そしてさらに何については、「かけ声ばかりの経済協力」という非難を蒙った汚名を雪ぐ意味でも、わが国としてできる範囲の経済・技術協力の増強に努めるべきであろう。最近の通産省資料によれば、一九六〇年三月末で、日本の東南アジアに対する海外投資は三〇、六〇一千万ドル、技術提携は一一九件に達したと報ぜられていゝる。そしてとくに日本の投資市場が、中南米中心から東南アジア中心に移行しつつあることが指摘され、今後益々この傾向は続くものと予想されている。しかも日本のこうした活動はまた、いままでもなく相手方の利益の向上に役立つものでなくてはならない。この意味からいって、日本の経済・技術協力は、いわゆる「開発輸入」の構想を骨子とするものであることが望ましい。すなわち、それはその生産物の対日輸出を長期に亘つて保証し、相手側に対し日本が安定した市場を提供できるように相手国の産業開発に対し、重点的に経済援助を与える方策である。そしてそれがどのような産業、さらにはどのような商品であるかの裁定についても、先ず相互の協議と研究が必要であることを、提言しておきたい。

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義 (一)

——一八四八年以前のチャーティスト運動とマルクスおよびエンゲルス——

飯 田 鼎

- 一、 はしがき
- 二、 イギリス労働者階級運動におけるチャーティストの役割の評価
- 三、 社会革命の担い手
- 四、 マルクス主義思想の形成史におけるチャーティスト

十九世紀のイギリス、すなわちフランス革命の影響にともなう疾風怒濤の時代から、ヴィクトリア女王の治世の終り、「世界史の新時代の主要な歴史的道標」としてのポア戦争の勃発までの百年間は、自由競争的な産業資本主義の確立とその爛熟、そして最高段階としての帝国主義への移行にともなうさまざまな矛盾を、もつとも鮮明に且つ定式化された形においてわれわれに呈示してくれる。まことにそれは、資本主義の祖国であることにより、ブルジョア経済学の建設という天才的な事業、プロレタリアートの出現と労働組合

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義 (一)

運動の発祥地、社会主義思想および実践の先駆者としての光榮を担っているものである。とりわけ一八四八年の革命を頂点とする国際的な民主主義運動の中心となった「文明ヨーロッパの三大国であるイギリス人、ドイツ人およびフランス人」のなかでも、英国の労働者階級はそのチャーティスト運動によって、プロレタリアートの解放の哲学としてのマルクス主義の成立に偉大な貢献をなしたのであった。一八四六年に、「フランス革命からはじまって、フランスの共産主義とイギリスのチャーティズムとして発展した近代民主主義の旗のもとでの諸国民の親睦、これこそ大衆やその代表者たちがドイツ的理論以上に事情に精通していることをしめすものである」とのべたエンゲルスは、さらに、「民主主義、それはこんちでは、共産主義である……民主主義はすでにプロレタリアの原理、大衆の原理となっている。大衆は、民主主義のこの唯一の正しい意義を、多かれ少なかれ明瞭につかんでいるであろうが、一般の人々にとっても、民主主義なるもののなかには社会的な権利の平等の、少なく

ともおぼろげな感じがふくまれている……。なぜなら、一八四六年には、とるに足りない例外を除けば、ヨーロッパのすべての民主主義者は、多かれ少なかれはつきりした共産主義者であるからである」と断言している(傍点筆者)。

ここで注目すべきことは、これらのエンゲルスのチャーティズムにたいする評価、その運動のなかに共産主義理論を見出そうとする努力が、かの一八四八年の革命勃発直前であったという事情——フランスにおける革命的状態の切迫——にかなり影響されていたことであり、とくに、チャーティスト運動のなかにフランス革命Ⅱ民主主義Ⅱ共産主義Ⅱチャーティストというような、思想的系譜を構想していたという事実は、前に引用した文章とつぎの一節を照合することによっても明らかであって、これは、フランス二月革命およびドイツ三月革命を経験する前のマルクスおよびエンゲルスがチャーティスト運動における革命的勢力——主としてジュリアン・ハーニーの運動——をもって共産主義思想の担い手として、大きな期待を抱いていたことを物語るとともに、反面、マルクス主義が、この大衆的な運動によって、いかに深刻且つ強烈な印象を与えられたかを物語っている。

「このもっとも急進的な分派は、チャーティストから、当然プロレタリアから成っていた。だが、このプロレタリアは、チャーティスト運動の目標をはつきりみとおして、それをはやく達成しようとしてたプロレタリアであった。当時、チャーティストの

一般大衆は、まだ国家権力を労働者階級の手につすことだけを問題にしている、この権力の利用について吟味する余裕をもっていたものは少数にすぎなかったのに反して、当時の激動のなかで重要な役割を演じたこの協会の会員たちは、つぎの点で全員一致していた。——すなわち、彼らはまず第一に共和主義者であった。それも九三年の憲法を自分たちの信条としてかかげ、ブルジョアジーとの結合は、小ブルジョアジーとの結合さえいっさい排撃し、抑圧されるものは抑圧するものとたたかうために、抑圧するものが自分にもちいる一切の権利があるという原則を堅持した共和主義者であった。だが、彼らは共和主義者であったばかりでなく、共産主義者で、しかも非宗教的な共産主義者であった。協会は、一八三八—三九年の革命的蹶起とともにつづれた。しかしその効果はうしなわれていないで、チャーティスト運動の活動力を強め、そのなかにある共産主義的諸要素を發展させるのに貢献した」。

われわれは以上に引用してきたところによって、チャーティスト運動が、マルクス主義成立史上において、きわめて重要な地位をしめるものであることを、ほぼ推測することができた。すなわち、マルクスおよびエンゲルスのイギリス労働運動にたいする影響はまず、このチャーティスト運動からはじまるのであって、以下これについてやや詳細に論ずることにしよう。

(1) レーニン「帝国主義論」堀江邑一訳(国民文庫版)所収、「帝

国主義と社会主義の分裂」一八六頁。

(2) エンゲルス「ロンドンにおける諸国民の祝祭——一七九二年九月二二日、フランス共和国建国祭に——、マルクスⅡエンゲルス選集第一巻二二二頁。

(3) 上掲書一一六頁。

(4) 上掲書一一八頁。

(5) ジュリアン・ハーニー(Julian Harney)のロンドン民主協会(London Democratic Association)の会員たちをさすものである。

(6) 上掲書一二二頁。

二

「マルクスは、人類の三つのもっとも先進的な国に属する十九世紀の三つの主要な思想的潮流の継承者であり、天才的な完成者であった。この潮流とは、ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学および一般にフランスの革命的諸学説とむすびついたフランス社会主義である」⁽¹⁾。マルクス主義にかんするレーニンのこの古典的な規定はイギリスに限る限り、スミスおよびリカードゥによって基礎づけられた古典派経済学のマルクス価値論にたいしてもつ意義を強調し、その重要構成部分のひとつとして認めたものであった。だがこのことは、マルクス主義が、イギリス社会主義運動の遺産を継承し、イギリス労働者階級の運動が、マルクス主義に及ぼした影響を

毫も否定するものではない。その空想的社会主義者としてのロバート・オーエンにたいする評価は、エンゲルスの「空想から科学への社会主義の発展」のなかににおける叙述から明らかであり、共産主義の先駆的な運動としての地位をあたえられている。しかしオーエンの共産主義運動が、その天才的な構想にもかかわらず結局近代的なプロレタリアートを担い手とすることに成功しなかったのに反し、ほぼ同じ時期に、イギリスの革命的な労働者階級は、空想的なオーエン主義をこえて、チャーティスト運動にその勢力を結集した。さきに指摘したように、エンゲルスの如きは、この運動のなかにフランス革命にはじまる近代民主主義の系譜につらなるものを見出し、つまりレーニンが、マルクス主義の三つの源泉のうち、フランスの社会主義のみをとくに指摘するにどめ、イギリスおよびドイツの共産主義運動にふれなかったのは、オーエンの共産主義運動や革命的なチャーティストたちの運動、あるいはウィルヘルム・ワイトリングの共産主義運動の歴史的意義とマルクス主義にたいするそれらの影響を故意に無視したものでないことはいうまでもない。けだしそれらは、多かれ少なかれフランスの革命的諸学説と結びついたフランス社会主義のいわば子孫もしくは姻戚関係にあったからではないだろうか。

マルクスとエンゲルス、とくにエンゲルスが、チャーティスト運動にはやくから注目し、その運動の推移を観察しながら、そのなかにイギリス労働者階級の革命的性格を見出し、革命家として社会革

命の担い手となるべき彼らに大きな期待をよせていたことは、たとえば彼の青年時代の傑作「イギリスにおける労働者階級の状況」のなかの「労働運動」を読めば明らかであろう。彼は、チャーティズムをつぎのように理解する。

「チャーティズムは、前世紀の八〇年代に、プロレタリアートと同時に、またプロレタリアートのなかで発達した民主的な政党のなかから発生したもので、この政党は、フランス革命の間に、勢力を増し、平和回復後の「一八一五年」には、「急進的な」政党として登場し、その本拠を、当時はバーミンガムとマンチェスターに、それ以前はロンドンにおいていた。自由主義的なブルジョアジーとむすんで、旧議会の寡頭政治家たちから選挙法改正法案を強奪し、それ以来、ブルジョアジーに対抗する労働者の政党として、ますます急速に強固となったのである。」

エンゲルスが、チャーティスト運動をもって、労働者の党とみなしたことは、要するに当時のホイッグ党およびトリー党のほかに、これらに対抗して労働者階級のみならず革命的な政党の結成に着手しつつあった事実の認識にもとづくものである。さらにつぎのようにべているのは興味深い。

「イギリスのチャーティストは共和主義者という言葉を出していうようなことはまったくないか、あったところでもったにないとはいえ、政治的には共和主義者である。一方たしかにチャーティストは、すべての国の共和主義的な政党と同じ意見をもち

好んで民主主義者と名のっている。しかしチャーティストは、ただの共和主義者以上のものである。その民主主義はけっしてただの政治的なものばかりではない。」

エンゲルスのチャーティスト運動にたいする理解ないし評価は、その運動が、主として共和主義的な思想をもちながら、しかもたんなる共和主義者にとどまりえないものであること、それが主として「労働者のあいだの運動であるが、急進的な小ブルジョアジーからはまだはつきりきりはなされていなかったこと」、つまり「労働者の急進主義がブルジョアジーの急進主義と提携していた」という点を重要な問題として把握しつつ、それにもかかわらず、チャーティストの意識が、ステイヴンスの煽動やフロストの暴動などによって革命的になりつつあることに大きな関心が払われている。とくに一八四二年に、第二次国民請願とこれにつづいておこった大不況の結果、マンチェスターを中心とするイングランド北部地方の工場地帯をまきこんだゼネラル・ストライキや蜂起のブルジョア階級にあたえた恐怖、そして彼らの労働者階級にたいする発砲などの破廉恥な行為によって、全体として労働者階級にたいするチャーティストの影響を弱めようとする動きについて、つぎのようにのべてた。

「チャーティズムの本質を純粹にあらわした第二の、もっとも重要な争点は、穀物法の問題であった。この問題に急進ブルジョアジーは利害関係をもっていたが、プロレタリアートはもっていなかった。だからこれまでのチャーティスト党は二つの党派に分

裂した。両派の公表された政治的原理は完全に一致していたが、それなのにまったくその質を異にし、一致することができなかった。一八四三年一月に開かれたバーミンガムの国民集会では、急進ブルジョアジーの代表者であるスタージは、チャーティスト協会の規約からチャートという名称を削除することを提案した。そのおもてむきの理由というのが、この名称が、さきの暴動をつうじて暴力的・革命的な思い出と結びついているというのである……。

この瞬間から、チャーティズムは一つの純粹な、あらゆるブルジョアジーの要素から解放された、といった性格をもつ労働者の事業となった。」

エンゲルスはすでにチャーティスト運動において、「労働者の急進主義」と「ブルジョアジーの急進主義」を区別し、その初期においては両者は同一歩調をとっていたことを指摘したのであるが、運動の第二段階ともいべき一八四二年の第二次国民請願以後は、「二つの党派」に分裂したというのである。そしてこの根本的な原因としてつぎのようにのべている。

「自由競争は、労働者に憎悪されるほど労働者を苦しめてきた。自由競争の代表者であるブルジョアジーは、労働者の公然の敵である。労働者は、競争を完全に自由にするこゝとによって、損失だけしか期待できない。労働者のこれまでの諸要求である一〇時間法案や資本家にたいする労働者の保護や、もっといい賃金や地位の保障や、新救貧法の撤廃や、これらすべてのことは、すくなく

くとも例の「六ヶ条」と同じように、チャーティズムに本質的に属することがらであり、自由競争と自由貿易に直接に対立するものだからである……。この問題こそ、プロレタリアートをブルジョアジーから、チャーティズムを急進主義から区別する点にはかならないからだ。そして、ブルジョアの頭では、プロレタリアートを理解することができないので、このことを理解できないのである。

しかし、この点にまた、チャーティストの民主主義と、これまでのあらゆる政治的なブルジョアジーの民主主義との相違があるのだ。チャーティズムは本質的に社会的性質のものである。」

エンゲルスの「イギリスにおける労働者階級の状況」は、一八四五年にその初版が出た。彼はチャーティスト運動の性格を以上のように正確に分析したので、この一八四五年以前において、一八四七年に大恐慌の襲来を予言し、それは激烈さと凶暴さという点では、従来のあらゆる恐慌を凌駕するであろうし、従ってチャーティストたちの闘争を激化させ、やがてチャーティスターを獲ちとるであろうことを予想したのであった。一八四八年のケンニングトン広場の大衆的行動は、憲章を支配階級に譲歩させるほどの圧倒的な勝利にはならなかったにしても、一八四七年から一八四八年にかけての恐慌が、ひとり英国のみならず、ほとんどヨーロッパ全土にわたって深刻な影響をあたえ、とくにフランス、ドイツおよびオーストリアには革命をひきおこし、資本主義史上稀に見る革命的な危機の年となったこ

とを考へるとき、その炯眼に驚嘆を禁じえないものがある。

つぎにエンゲルスは、オーエン主義の労働者階級にたいする影響についてふれ、さらにイギリス労働運動におけるオーエンの社会主義とチャーティズムの相互の關係について論じている。まずオーエンの平和的な説得による社会主義の実現方法については、つぎのように鋭く批判する。

「だが同時に、社会主義者はひどく抽象的であるので、彼らの原理をいまのままの形にしておくならば、公然と説得するという目的は、けつして達成できないであろう。社会主義者は、たえず下層階級の墮落を嘆いているけれども、それなのに社会秩序のこうした分解のなかにある進歩的な要素にたいしては盲目であるし、また有産階級のあいだにみられる私利と偽善の墮落のほうに、はるかに悪質であることを考へないのである。社会主義者は、歴史的発展をすこしも認めない。だから、国民をいきなり、すなわち政治が自然に解体する終点までつづくのも待たずに、すぐさま共産主義的状态におきたいとおもうのである。」

過去とのあらゆる結びつきを絶ちきつた抽象的な人間の発達しか認めないという空想的な社会主義者の形而上学的思考様式、階級調和的な博愛主義が、共産主義社会の実現のためにいかに無力であるかを洞察したエンゲルスは、チャーティストの立場を通じてのみイギリス社会主義運動が、将来偉大な成果をおさめうることを力説しているのは、教訓的といふべきであろう。

社会主義とチャーティズムとの合同、イギリス的な方法によるフランス共産主義の再生産は、きわめて近い将来のことであつて、部分的にはすでにはじまつている。これが実現されたときにはじめて、労働者階級は実際にイギリスの支配者となるであろう——政治的、社会的な発達はその間にも進捗し、この再生の政党、このチャーティズムの前進をたすけることである。」

ここにのべられていることとさきに引用した一節とから明らかによろに、エンゲルスは、フランス社会主義を、その理論的な発達の面では、イギリス社会主義よりもはるかに進んだものとみなし、むしろチャーティストと社会主義者との合同を通じフランス社会主義のイギリス的方法における再生を期待することによつて、やがては、イギリスにプロレタリアの共産主義政党的結成が実現される日の近いことを予想しているのである。この予想は、一八五〇年代におけるチャーティズムの解体、ブルジョア急進主義者と労働組合主義者による第二次選挙法の改正にもなつて裏切られてしまつたけれども、ここにイギリス、フランスおよびドイツというヨーロッパ文明の発展に先進的な役割を果した三つの国民のうちでも、階級意識にめざめた近代的なプロレタリアートの運動が、もっとも早くから発展しつゝあつたイギリスにたいする彼の高い評価が秘められていると同時に、ドイツの状態の後進性にたいする不満、これを改善しようとしながらも、もっぱら思弁的方法によらうとする理論家への忿懣、そしてドイツのプロレタリアートの未成熟の認識があることを

「けれども現在すでに多くの社会主義者と、そのほとんど全員が社会主義者であるチャーティストの多くの指導者との場合に明らかになつていふように、チャーティズムをとりぬけ、自分の体内にふくむブルジョアジーの要素を一掃した真にプロレタリア的な社会主義が、きつとそしてそれも近い将来に、イギリス人民の発展史上に、重要な役割をひきうけるであろう。その基礎の点では、フランスの共産主義をはるかに凌駕しているが、その発達の点ではこれにおくれをとつていふイギリスの社会主義は、のちにフランスの共産主義を凌駕するために、一時フランス人の立場に後退しなければならぬであろう。」

「自分の体内にふくむブルジョアジーの要素を一掃した真に、プロレタリア的な社会主義が、きつと、そしてそれも近い将来に、イギリス人民の発展史上に、重要な役割をひきうける」ようになるために、チャーティストと社会主義者の合同を、いかに彼が熱望していたか、エンゲルスのつぎの叙述は、このことを物語っている。

「したがつてわれわれは、労働運動が二つの分派に、チャーティストと社会主義者とに分裂していることを知るのである。チャーティストはもっともおおかれており、もっとも未発達であるが、その代りに、ほんものの生きていふプロレタリアであり、プロレタリアートの代表者である。社会主義者はもっと目さきききいて、實際的な窮乏対策を提案するけれども、もともと生まれはブルジョアジーであるために、労働者階級と融合することはできない。社

知らねばならない。

- (1) レーニン「カール・マルクス」レーニン全集第二十一巻(大月書店)所収、三七頁。
- (2) Karl Marx und Friedrich Engels, Gesammelte Werke, 1958, Bd. 2, S. 444. (Die Lage der arbeitenden Klasse in England; Arbeiter Bewegungen.) 大内兵衛・細川嘉六監訳「マルクス・エンゲルス全集」(大月書店 第二巻四六三頁)。
- (3) Eberda; S. 445. 邦訳前掲書四六四頁。
- (4) Eberda; SS. 449-450. 邦訳前掲書四六九頁。
- (5) Eberda; SS. 450-451. 邦訳前掲書四七〇頁。
- (6) Eberda; S. 452. 邦訳前掲書四七二頁。
- (7) Eberda; SS. 452-453. 邦訳前掲書四七二頁。
- (8) Eberda; S. 453. 邦訳前掲書四七三頁。

三

エンゲルスが、チャーティストと接触するに至つた経緯について、グスタフ・マイエル (Gustav Mayer) は、その著「フリードリヒ・エンゲルス伝」のなかでつぎのようにのべている。

「チャーティストについては、エンゲルスは、その頃、ジェームズ・リーチを訪問した。リーチは、マンチェスターで、工場労働

者として暮らしており、労働者階級の間で、その専門的な知識と健全な理解力のおかげで、重要な帰依者をもって来た。一八四三年の夏に、エンゲルスが、リーズにおけるノーザン・スターの編集について、オコンナーの保護のもとに、影響力の強いこの労働者新聞を主宰していたジョージ・ジュリアン・ハーニー (George Julian Harney) と関係を結んだことは、重大な結果をもたらしたものであった。」

このノーザン・スターに、エンゲルスも時々寄稿したのであったが、E・H・カーも指摘しているように、チャーティストは、世界の唯一の有効に組織された労働者政党として、資本家階級にたいする階級の指導者たるべく運命づけられた政党であると思われたのである。そしてここにこそマルクス主義思想の実現のために役立つ肥沃な土壌が見出されたのである。マルクスおよびエンゲルスが、チャーティストたちの革命的な行動について語るとき、彼らは、当然ドイツの状態について、専制的な絶対主義国家、小規模な家内工業やマニファクチュアが支配的で、プロレタリアートの数もイギリスやフランスの労働者よりもはるかに少なく、またブルジョア階級といえはフランスのブルジョアジーが、歴史上未曾有の巨大な革命によって支配を獲ち得たのに反し、絶対主義勢力の下僕として甘んじていたドイツの状態をたえず脳裡に浮かべていたにちがいない。エンゲルスは、一八四六年四月四日のノーザン・スター紙上に、つぎのように書かなければならなかった。

運動によって敗れ去ったこと、このことをわれわれは、イギリスの労働者階級が自由貿易の勝利後とるべき自分たちの立場を熟知していることのしるしだと考える。この事実からわれわれはつぎのように結論するものである。すなわち労働者階級はよく知っている——いまや中間階級がその主要な施策を貫徹し、あとはただ貴国の公認支配階級となるためには、現在の弱体な中間内閣のかわりに、精力的なほんとうの中間階級内閣をつくりさえすればよい現在、資本と労働、ブルジョアとプロレタリアの大闘争が結着をつけなければならないというところを。土地貴族が闘いから退却したことによって、いまや戦場は整理されている。闘争のおこりうるのは、中産階級と労働者階級のあいだだけである。……イギリスの労働者たちがこの双方の側の事態の変化、第三者たる貴族の決定的敗北とともにじまったチャーティスト運動の新时期、中間階級の報道機関の「黙殺の共同謀議」にもかかわらず、チャーティズムが今後しめるべき、またしめざるをえない優勢な立場、最後にこれらの新事態によって彼らの肩にかかってきたあたらしい任務を充分に承知していることをみて、われわれは欣快に思うものである。」

同じようなことを、マルクスは、一八四七年一月一日の在ブリュッセル・ドイツ新聞につきのように書いている。

「労働者が実際にかような態度をとることについては、イギリスのチャーティストたちが最近の穀物法反対同盟運動でかがやかし

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義 (一)

「一八三四年から一八四〇年までの間、ドイツでのあらゆる大衆運動は死滅していた。一八三〇年と一八三四年の活動家たちは、投獄されるか、または諸外国に亡命して、ちりぢりになった。かつて活動の期間中、中産階級の臆病さを多分にもっている連中も、検閲官の厳酷さの増加や中産階級の無視や無関心の増大にたいしてたたかいつづけた。議会の野党派の指導者たちは、議会で長舌をふるいつづけたが、政府は多数の票を確保することができた。ドイツでは、これ以上いかなる大衆運動をもまきおこす機会はないようにみえた。政府は万事を思うとおりにやってのけた。」

同様にマルクスが、ドイツ・イデオロギーの第三部「聖マックス」において嘲笑的に描いたドイツの状態、このような惨めな状態にたいする憎悪は、ますますチャーティストにたいする讃辭に拍車をかける結果になったことは当然である。一八四六年七月二五日のノーザン・スターには、「在ブリュッセル・ドイツ民主的共産主義者からファীগス・オコンナーへの挨拶」が、マルクスおよびエンゲルスの署名のもとに掲載されているが、この冒頭にはつぎのような一節がみられる。

「ノッティンガム選挙におけるあなたのすばらしい成功にさいして、吾々はここに、あなたにたいし、またあなたを通じてイギリスのチャーティスト諸氏にたいし、このめざましい勝利をお祝い申し上げる。自由貿易の徒が敗れ去ったこと、しかも自由貿易の原理が議会で勝利をしめるとき多数のチャーティスト大衆のい一例を示した。彼らは、瞬時もブルジョア急進主義者らの嘘や妄想を信じなかった。瞬時も彼らにたいするその闘争を断念しなかった。だが彼らは充分意識して彼らの敵がトリー党にたいして勝利するように援助し、その穀物法廃止ののちは、選挙場において対立するものはやトリー党と自由貿易論者ではなく、自由貿易論者とチャーティストであった。そして彼らは、これらブルジョア急進主義者たちに対立して、議会に席を占めたのである」。

みられるとおり、ここには、(一)一八四六年の穀物法の撤廃をもって、チャーティストとブルジョア階級との勝利として評価したところ、(二)その結果として、従来までブルジョアジーとプロレタリアートとの間に介在していた土地貴族の勢力の後退、(三)従って、ブルジョアジーとプロレタリアートの利益を代表するチャーティストとの間に、激烈な闘争が演じられる必然的な形勢にあること、以上のようになり、この当時のイギリスの社会的政治的状況の推移が、マルクスおよびエンゲルスによって把握されているとすれば、とくに一八四八年の恐慌となって露呈されるべき資本主義の矛盾が、すでに英国社会の一部に萌しはじめたことという点を考慮した場合、彼らが資本主義の全般的な危機に直面して、チャーティストをもって社会革命の担い手として希望を托したことは決して偶然ではない。そこでわれわれは、いままでマルクスおよびエンゲルスがチャーティスト運動にどのような評価を下したか、この点について彼らをして語ら

一七 (一〇三七)

四

しめたのであった。一八四八年の革命を契機として、チャーティスト運動そのものも新しい段階に入り、労働運動も革命後、各国の労働者階級の間に関連精神が芽生えることとなって次第に国際的な規模に発展し、このような状況の変化のなかで、マルクス主義は、国際的な革命的な社会主義運動のイデオロギーとしての地位を獲得するのであるが、同時に英国資本主義の変貌の過程のなかでチャーティスト運動も変質を蒙り、マルクスやエンゲルスのチャーティスト運動にたいする評価も、革命以前のものと異なったものとなった。この点についてはのちに追求するとして、一八四八年以前のチャーティスト運動が、マルクス主義思想の発展にどのように寄与したか、この問題について、マルクス主義の理論的形成にかかわらしめて論ずることにしたいと思う。

われわれはいま、マルクスおよびエンゲルスの思想的形成の過程において、イギリス労働者階級の運動がどのような地位を占めるものであるか、この点について論ずるに先立ち、一八四八年までの、マルクス主義の革命的共産主義としての定礎期ともいべき非常に重要な時期に、彼らがうち樹てた主要な業績について考察しなければならぬ。便宜上つぎのような表にあらわしてみることしよう。

- (1) Gustav Mayer: Friedrich Engels, Eine Biographie, 1934, Erster Band, S. 139.
 - (2) E. H. カール、石上良平訳「カール・マルクス」(未来社) 七三頁。
 - (3) マルクス・エンゲルス選集(大月版)第一卷一六七頁。
 - (4) 前掲書、第一卷二〇〇頁。
 - (5) 前掲書、第二卷八〇頁。
- 一八四三年 ヘーゲル法哲学の批判
 ユダヤ人問題によせて(マルクス)
 ロンドンだより(エンゲルス)
 大陸における社会改革の進展(エンゲルス)
 一八四四年 国民経済学批判大綱(エンゲルス)

- 一八四四年 イギリスの状態—トマス・カーライル『過去と現在』(エンゲルス)
- イギリスの状態—十八世紀(エンゲルス)
 イギリスの状態—イギリスの憲法(エンゲルス)
 聖家族、別名、批判的批判の批判、ブルノ・パウアとその伴侶を駁す(マルクス・エンゲルス)
 一八四五年 イギリスにおける労働者階級の状態(エンゲルス)
 ドイツにおける共産主義の急速な進展(エンゲルス)
 近代に成立し今もなお存続している共産移住地の記述(エンゲルス)
 "ドイツの状態、第一信『ノーザン・スター』編集者あて(エンゲルス)
 " ロンドンにおける諸国民の祝祭—一七九二年九月二二日のフランス共和国の創設を記念して(エンゲルス)
 " フォイエルバッハにかんするテーゼ(マルクス)
 一八四五—六年 ドイツ・イデオロギー(マルクス・エンゲルス)
 一八四六年 ファーガス・オコンナー氏へのブリュッセル所在ドイツ民主共産主義者の挨拶(マルクス・エンゲルス)
 " プロシヤ憲法(エンゲルス)
 一八四七年 カール・グリュンへの反対声明(マルクス)
 " ドイツの現状(エンゲルス)
 " 哲学の貧困(マルクス)
 十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(一)
- 一八四七年 ギゾーの来らんとする崩壊—フランス・ブルジョアジの立場(エンゲルス)
 " ライニッシュェ・ベオバッハターの共産主義(マルクス)
 " 「真正」社会主義者にかんする二つの論文
 " 共産主義者とカール・ハインツェン(エンゲルス)
 " イギリスにおける商業恐慌—チャーティスト運動—アイルランド(エンゲルス)
 " 道徳的批判と批判的道徳(マルクス)
 " チャーティストの農業綱領(エンゲルス)
 " スイス農民戦争(エンゲルス)
 " フランスにおける改革運動(エンゲルス)
 " 一八三〇年のポーランド革命記念日に(エンゲルス)
 " チャーティスト運動(エンゲルス)
 一八四八年 フランス—政治的経過(エンゲルス)
 " アイルランドおよびチャーティストにたいする強制的な法案(エンゲルス)
 " ファーガス・オコンナーとアイルランドの人民(エンゲルス)
 " 自由貿易問題についての講話(マルクス)
 " 共産党宣言(マルクス・エンゲルス)
 " こうして整理してみると、マルクスおよびエンゲルスの理論的・思想的な形成は、まずライン新聞にのせられた一連の論文、出版の

自由と森林盗伐についての評論というライン州議会にかんする問題
をとりあつかうことによつて、国家権力とのはげしい闘争をもって
はじめられたものであることを知るであらう。言論・出版の自由を
不当にも封建的・身分制的な概念によつて制限しようとする検閲制
度にたいするはげしい皮肉に満ちた論評には、あくまでもブルジョ
ア・デモクラシーを擁護するという革命的民主主義の臭いが強烈で
あるのに反し、森林盗伐の問題では、マルクスは圧迫される農民の
側に立っていた。彼はここではじめて、経済的な問題に直面し、慣
習的権力の国家権力による農民からの剝奪の意味をさと、「国家
のすべての機関は、森林所有者の利益をきき、監視し、評価し、保
護し、つかみ取るのに使つ耳、目、手、足である」ことを発見し
た。

レーニンも指摘するように、「ライン新聞」の主筆としてのマルク
スは、「ここで、観念論から唯物論への、また革命的民主主義から共
産主義への移行があらわれはじめた」のであった。やがて彼はフォ
イエルバッハがヘーゲルの弁証法を全部捨ててしまったのとちがっ
て、ヘーゲルの弁証法の批判的再検討をはじめ、その合理的な核心
をとりだし、新しい唯物論的弁証法の基礎をきずいた。一八四三年、
封建的・ユンカー的抑圧によつてライン新聞が禁止されたのも、マ
ルクスはフランスへ移住したのだが、彼はフランスで、レーニンに
よつて「マルクス主義の三つの源泉とみなされたフランスの空想的
社会主義⁽⁴⁾およびその影響のもとにあつたワイトリングの共産主義を

いっそう深く系統的に研究するとともに徹底的に検討批判をはじめ
たのであつた。しかし重要なことは、一八四四年二月アーノルド・
ルーゲとの共同編集によつてパリで創刊された独仏年誌こそ、マ
ルクス主義形成の上で偉大な役割を果したことである。マルクスが
ここに「ヘーゲル法哲学批判」と「ユダヤ人問題」をのせ、エンゲ
ルスが「経済学大綱」と「イギリスの状態」をのせたことは、第一
号を第二号との合併号として出すにとどまつたというこの雑誌のき
わめて短い生涯にもかかわらず、マルクスの思想において観念論か
ら唯物論への、そして革命的民主主義から共産主義への移行が完成
されたことを意味していた。そればかりではない。この二人の偉大
な思想家の間に、終生ゆるることのない堅い友情のきずなが結ばれた
ことと同時に、あきらかにエンゲルスの示唆によるところ大きいと
思われるが、マルクスが、本格的に経済学の研究にとりかかる準備
をはじめたことであつた。

一方、エンゲルスはどうであつたらうか。「最初ヘーゲル左派に
属し、一八四二年から共産主義者となつたエンゲルスは、マルクスと
は異なつた、ある意味では彼よりも広い社会的経験をもつていた。
彼にとつてプロレタリアートとは、当時マルクスが考へていたよう
な、哲学が自己を実現するための手段というふうなものではなかつ
た。大紡績業者の息子であつた彼は、父の工場の労働者の貧困ぶり
を身近かにみていた。家の都合でマンチェスターにおくられた彼
は、イギリス資本主義を研究した。彼の『経済学批判大綱』は、マル

クスがやつと経済学に関心をいだきはじめた頃に、『独仏年誌』に
発表された。マルクスは、この論文に『天才的なもの』を見出し
た⁽⁵⁾。以上のルフェーブルの指摘からも明らかのように、エンゲル
スは、マルクスとちがつて、抽象的に考へるよりも具体的に考察
し、精密な理論的体系の樹立よりも現実におこりつつある事象の正
確な把握および描写、あるいは歴史的な記述の手法にもっとも純爛
たる才能を発揮した。早熟で天才的なエンゲルスは、マルクスが経
済学を研究しはじめた頃、すでにイギリスの経済社会の動きを洞察
することによつて、ますますはげしくなる階級分解、たえず深刻化
する過剰生産恐慌、資本と労働との対立を、きわめて簡潔に描き出
したのであつて、ここには、科学的社会主義のあらゆる萌芽が要約
的に現われている。

さて、われわれにとって当面の課題は、さきに指摘したように、
マルクス主義がイギリス労働運動によつて何を教えられたか、云い
かえれば、マルクス主義はそれによつて、その内容をいかに豊かに
することができたかといふことであつた。『経済学批判大綱』によつ
て、スマスからマルサスに通ずる古典派経済学を批判し、そのブル
ジョアの性格を暴露したエンゲルスは、恐慌と失業をして飢餓賃金
に喘ぎながら闘っているイギリスのプロレタリアートに、「新しい
階級」としての自覚を発見するのである。彼は、トーマス・カーラ
イルの『過去および現在』の紹介という形で発表した「イギリスの
状態」のなかでつぎのようにいつている。

十九世紀イギリス労働運動とマルクス主義(一)

「イギリス人——というのは、大陸でイギリスの国民性を判断す
る際の基準としてゐる教養あるイギリス人のことであるが、この
イギリス人は、世界でいちばん軽蔑すべき奴隷である。イギリス
国民のうちで大陸に知られていない部分だけが、すなわち労働者、
イギリスの賤民、貧民だけがいかにも粗野で、墮落しているにも
かかわらず、真に尊敬に値する。イギリスを救ふ力は、彼らの方
ちからでなくてはならない」(傍点筆者)

こうしてエンゲルスはついにチャーティストを発見したのである。
マルクスにせよエンゲルスにせよ、このときまでにすでに、社会
革命の担い手となるべき階級は、プロレタリアートでなければなら
ぬということを理論的に把握してゐたにしても、イギリスにおける
労働者階級の革命的な運動を見るまでは確証されなかつたはずであ
る。なるほどイギリスの労働者階級は、理論的な面で弱い点がある
けれども、しかしイギリスには、他の諸国、とくにドイツにはみら
れないもの、発展した労働運動と巨大な労働組合およびチャーティ
スト党が存在していた。

マルクスとエンゲルス、とくにエンゲルスは、一八四四年以後、
イギリスの状態にかんする論文が目立って多くなり、しかもドイツ
の社会主義運動に絶えず注意しながら、これと対比しつつ、チャーテ
ィストの動きに注目している。そしてついに大著『イギリスにおけ
る労働者階級の状態』に到達するのである。ここでは、明らかに、
チャーティストは来るべき社会革命の担い手、チャーティスト党

は、革命の中核としての期待をこめて描かれている。一八四八年以前のマルクスとエンゲルスは、イギリスにおいて、何よりも階級闘争の激化、その結果としての社会主義革命の必然性を、チャーティスト運動において見る事ができた。革命の担い手となるものはワイトリングの主張するように、リンペン・プロレタリアではなく、いわんやブルードンの小生産者の組合でもなく、また真正社会主義者の小ブルジョアでもなくて、実に近代的なプロレタリアートであることを、チャーティスト運動は、マルクスおよびエンゲルスに確信させなかったであろうか。一八四六年以後の彼らの著作、とくに『ドイツ・イデオロギー』や『哲学の貧困』において、ブルードン主義者や真正社会主義者にたいする批判が痛烈となったのは、こうした事情からでもあった。

しかし一八四八年以前において、マルクスとエンゲルスがチャーティストからうけた影響は以上のようなものであるとしても、その高い評価が、そのままつづいたかという点になると、一八四八年の革命を無視することはできない。一八四八年の革命の失敗以後における国際的労働運動の発展のなかで、チャーティスト運動も質的転換をとげ、またマルクス主義も、共産主義者同盟——共産党宣言という歴史的な見通しを再検討する必要にせまられたとき、彼らのチ

ャーティストにたいする評価も当然変らざるをえなかった。ここに
おいてわれわれは、一八四八年の革命をめぐるイギリス、ドイツおよびフランスの労働者階級の動きにたいして、マルクスおよびエンゲルスがどのように行動したか、一八四八年以後の彼らのチャーティストにたいする態度を知るためには、当然この点を問題にしなればならないことを知るであろう。

- (1) マルクス・エンゲルス全集第一巻所収(大月版)、第六回ライオン州議会の議事、木材窃盗取締法にかんする討論。
- (2) レーニン「カール・マルクス」全集第二巻所収。
- (3) ローゼンベルク著副島種典訳「初期マルクス経済学説の形成」(大月書店) 三七頁。
- (4) ルカーチ著、平井俊彦訳「若きマルクス」(ミネルヴァ書房) 九五頁。
- (5) アンリ・ルフェーブ、吉田静一訳「カール・マルクス」(ミネルヴァ書房) 一一五頁。
- (6) 全集第一巻五七三頁。

——一九六〇・一〇・一四——

近代自然法思想の展開に関する一考察(二)

野 地 洋 行

四、近代自然法思想とドイツ観念論哲学

- 1 ドイツにおける近代自然法思想
- 2 日本におけるカント研究の偏向
- 3 ドイツ的近代自然法とカント哲学
- 4 結び——カント哲学の評価

四、近代自然法思想とドイツ観念論哲学

1 ドイツにおける近代自然法思想

すでにみてきたように、近代自然法思想のイギリスおよびフランスでの発展は、中世における、神によって上から与えられた秩序観に代って、平等な自然的権利をもつ個人が、下から与えられた新しい秩序観が支配してゆく道程であった。社会契約という契約論が重要になるのは、自然法が決して神から天降ってくるのではなく、そこに権利の相克が前提とされ、秩序のためには構成各員の同意が必要であることを示している。もちろんこのことはすでにのべた通

近代自然法思想の展開に関する一考察(二)

二三 (一〇四三)

り、中世の封建的秩序観に代って、近代資本主義の勃興にもとづく近代的個人の自覚がますます成長してきたことを物語っている。古い固定的・身分的社会秩序を、新しい平等な個人の契約関係におきかえようという思想的努力の度合いは、その社会における資本主義的生産諸関係の発展の度合いに比例している。かくて周知のように、中世的封建制度を早くも打破し、真先に資本主義への道を歩みはじめたイギリスが、自然法思想の近代化のチャンピオンたるホッブズやロックを生み出したのも当然の成行きであったといえよう。

だが、中世から近代への移行の根本的基盤が経済的生産過程の中にこそあったがために、この自然法思想の近代化過程はつまるどころ、神秘的な神の秩序のベールの中から、徐々に経済的秩序が発見され認識されていく過程でしかなかった。すなわち、グローチウスが神の秩序に代って理性の秩序を宣言し、ホッブズは「万人に対する万人の闘争」を宣言することによって抽象的な力の秩序、つまり政治的秩序の観念をうちたて、ロックは労働に所有権の源泉を認める